

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4076200205		
法人名	社会福祉法人 正松会		
事業所名	グループホーム 椿の里		
所在地	〒820-0084 福岡県飯塚市椿623番地20	TEL	0948-28-3839
自己評価作成日	平成23年3月10日	評価結果確定日	平成 23年 04月 16日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

季節を感じる行事を取り入れ、利用者が重度化してきている中、職員が協力し、積極的に外出もしている。職員に年配者が多く、食事は利用者に馴染みのある食事、食べやすい食事が料理され利用者、家族に好評です。
ホームは木造平屋建てでバリアフリーでゆったりとした造りです。母体施設と行事を共同でしたり、施設の看護師、栄養士等連携を取り、協力してもらっている。家族の面会が多く、利用者の長期入居の方が多く、安心して利用して頂いていると思います。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://kohyo.fkk.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

飯塚市郊外の緑に囲まれた小高い丘の上に、複合福祉施設併設の、グループホーム椿の里がある。隣接する市立飯塚病院とは、医療連携が確立され、24時間、365日の支援体制がある。管理者、職員が、永年勤続者で、ベテランの強みを活かし、利用者一人ひとりの情報や状態を、良く把握し、同じ目線で接し、今、何を望み、何をしたいのかを聴きだし、要望に応える支援をしている。開設9年目を迎え、夏祭り、獅子舞、幼稚園児との交流等、活発な活動が始まっている。また、管理者の介護に関する熱い思いを職員が理解し、チームワークを発揮して物事に取り組む姿を、家族が見て、深い信頼関係ができています。また、調理自慢の職員が作る料理は、新鮮な食材で、薄味に仕上げ、利用者の健康増進の源として貢献し、今後は、益々期待されるグループホーム 椿の里である。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 北九州シーダブル協会		
所在地	福岡県北九州市小倉北区真鶴2丁目5-27	TEL	093-582-0294
訪問調査日	平成 23年04月07日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	リビングに椿の里の理念を掲げ、地域とのつながりを求め外出したりし、利用者が穏やかに、安心して暮していただけるようにしている。	「住み慣れたところでその人らしく穏やかに暮らせるように支援します」という理念を、職員全員で話し合いながら作成し、実践するための様々な工夫に取り組んでいる。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	幼稚園児、地域の慰問ボランティア、盆踊り等との交流したり、正松会主催の夏祭りに地域の方に来てもらい、交流している。	法人全体で地域との交流に取り組み、夏祭り、獅子舞、幼稚園児と七夕飾りを一緒に作るなど、地域に開かれた事業所となれるよう日々努力している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	いつでも見学、相談、研修を受け入れて、認知症の理解の浸透に努めているが、積極できていない。		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎回利用者の介護状況を報告、意見交換している。また、その結果をホーム内に掲示し、椿の里だよりに記載している。	運営推進会議は2ヶ月毎に開催し、各委員からは、質問、要望、情報提供など活発な意見が出されている。また、出された意見は検討し、ホーム運営にできるだけ反映させている。	
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に参加してもらったり、市より派遣の介護相談員に毎月来てもらっている。	運営推進会議に、行政職員が参加し、情報や意見交換をしている。また、法人本部と連携し、地域福祉のあり方などを検討し、実践に向けて取り組んでいる。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	研修会、勉強会に参加し、それをグループホーム会議で発表し、マニュアルを読み、介護の実践生かしている。	マニュアルを作成し、職員一人ひとりに理解してもらい、職員同士で確認し、身体拘束のない介護を実践している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修会、勉強会に参加し、それをグループホーム会議で発表し、マニュアルを読み、介護の実践生かしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	6	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修会、勉強会に参加し、基本的なことは理解できている。4月の家族懇親会でも勉強会を予定している。	権利擁護に関する制度を理解するために研修を受講し、内部では伝達研修を行い、職員全員が理解し、利用者、家族が必要な時にいつでも制度を活用できる体制を整えている。また、資料、パンフレット等を用意している。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前、契約時に十分説明を行っている。		
10	7	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を置いているが意見を入れる方はおられませんので、アンケート、懇親会、運営推進会議の意見、日々の生活、家族との会話の中から汲みとるようにしている。	管理者は、家族に月に何回でも訪問してもらえるように、利用者に必要な物を持ちしてもらったり、電話などで利用者の状況をきめ細かく説明し、要望等も聴きだす努力をしている。	
11	8	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月グループホーム会議を開き、職員全員で情報を共有し、ケアについて会議し、職員の意見、提案をきいている。	毎月職員会議を開き、状況や課題を全員で把握し、検討しながら、解決のための努力をしている。職員間のチームワークは良く、意見も言い易い雰囲気である。出された意見は法人本部にも報告し、出来るだけ反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者を含め各職員には、皆それぞれが研修・経験等を活かし、それを実践できる職場環境を作っていると思う。又、資格取得や有給休暇が取れる職員配置も心がけている。		
13	9	○人権尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	採用に関しては、性別や年齢等で採用対象から排除しないようにしている。資格に関しては、介護福祉士・2級ヘルパー有資格者で、無資格者は採用後取得を条件に採用している。資格取得の際には勤務体制の配慮が行われる。	管理者は、職員一人ひとりが生き生きと働けるような環境を整備し、研修参加や資格取得のための勤務ローテーションの見直しなど、支援体制を整えている。	
14	10	○人権教育・啓発活動 法人代表及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	新人研修・職員会議等で機会ある毎に人権研修・啓発活動に取り組んでいる。特に拘束委員会を作り、人権・倫理・拘束等、内部・外部研修に参加し後日伝達し、全職員に周知徹底するように努めている。	拘束委員会で人権について検討する機会を持ち、人権についての外部研修を受講し、内部研修で、利用者の人権について話し合い、日々の介護に活かしながら啓発活動に繋げている。	
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	認知症介護実践者研修・グループホーム協議会等の研修・法人内の研修に職員の力量に応じ、積極的に参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協議会の研修会・懇親会、市の介護相談員訪問の交流会で同業者との交流がある。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前より本人・家族より聞き取りしている。利用先のディサービスに職員が数回会いに行っている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ケアマネ・利用先のディサービス・ショートステイ等より情報を得たり、入居前に家族並びに本人より聞き取りしている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ディサービス・ショートステイの職員、ケアマネより聞き取りし入居のタイミングを図っている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	できるだけ自由に暮していただけるように見守りしている。洗濯ものたたみや、台拭きをしてもらったりしたり、共にテレビを見たり、歌を歌い、雑談している。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者の誕生日を家族と共に祝ったり、美容室通い・通院などできるだけ家族にしている。面会時家族とゆっくり居室で過ごしてもらっている。		
22	11	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域の行事に参加し、なじみの方に会えるように支援している。入居前より利用されていた美容室を利用してもらったり入居前利用のディサービスにお連れしている。	入居前に利用されていたディサービスの友人との交流や、馴染みの美容院への送迎など、本人の希望を聴き、家族と相談しながら、出来るだけ馴染みの関係が途切れないよう支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食卓の席・ソファの席など会話が弾むように配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	特養に移られた方に声掛けに行ったり、家族と会話している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	12	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居前より本人・家族・ケアマネより聞き取りしたり、日ごろの様子を見ながら希望の把握に努めている。	勤続年数の長い職員が多いため、利用者の昔からの習慣や嗜好などを把握しており、意向の表出が難しくなった現在でも、利用者の意向に沿った介護が出来ている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族・本人・ケアマネ・面会の知人より情報を得ている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	バイタルチェック・普段の生活・レクリエーション等を通し利用者の現状の把握に努めている。		
28	13	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者、家族の要望をふまえ、ケア会議を開き全職員で介護計画を作成している。ケア会議に家族が参加することもある。	介護計画は、利用者、家族の希望を取り入れ、関係者で話し合い、作成している。見直しは3ヶ月毎に行い、状態変化や急変に備え、家族と連絡を密に取り、その都度見直しできる体制がある。	
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人記録・介護日誌・連絡ノート・申し送りを利用し情報を共有し、ケア会議で介護状況を見直し、介護計画書を作成している。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その人らしく生活が送れるように職員皆心掛けている。利用者全体が重度化してきて行事を重度化に即して見直している。		

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	町の文化祭・蛸まつりの見学で知人に会えるようにしている。又幼稚園児と七夕交流をしている。	
32	14	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族・本人の希望する病院に受診している。家族が付き添えないときは職員が同行している。かかりつけ医の定期往診がある。	利用者や家族の希望により、かかりつけ医、提携医を選択してもらい、家族と密に連絡をとりながら情報を共有し、安心して適切な医療が受けられる支援をしている。
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	同じ敷地内の特養の看護師に病状、薬の情報などの相談をしている。看護師は治療法などを教えてくれる。	
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	退院後も入院前と同じような人間関係ができるように頻りに面会に行き職員の顔を忘れられないように努めたり、遠くの家族のために洗濯物をしている。面会時、家族・病院関係者より情報を得ている。	
35	15	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時は終末期できるだけ「椿の里」でと言われるが、重度化すると特養入所を希望する家族がおられる。重度化にともない家族が負担を感じないようにその都度話し合っている。	法人内に特養が、隣接地には飯塚市立病院があり、利用者や家族の要望を最優先し、重度化や終末期に向けて、安心して安全に暮らせるよう、家族や関係者と相談しながら、実践できる体制を確立している。
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急の研修は受けている。日中は同じ敷地内の特養の看護師に頼ることが多い。訓練は定期的にはしていない。	
37	16	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	昨年は夜間の避難訓練もし、年3回避難訓練をしました。同じ敷地内の特養との協力体制がある。	年三回昼夜を想定した避難訓練を実施し、法人内職員にも参加してもらい、災害対策に取り組んでいる。 非常災害に備えて、非常食、飲料水、毛布、災害対策用備品などの備蓄が望まれる。また、地域住民の参加を得ての避難訓練を、運営推進会議などを通じて実施されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	17	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人個人にあった言葉かけをしている。最近入居された方で神経質な方がおられるので職員気を引き締め直している。	管理者の介護に対する気持ちを職員が理解し、利用者の尊厳やプライバシーを守り、利用者一人ひとりを尊重した介護を実践できるよう工夫している。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の思いを行動、発語で汲みとっている。多数からの選択は難しいので二者選択の場面を増やしている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	自室で過ごされる方、リビングで過ごされる方自由にしてもらっている。意思表示困難な方は体調をみながらリビングで過ごしていただいている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	外出時はおしゃれして出かけている。行きつけの美容室に行っている。体力的に美容室にいけない方は上手な訪問美容師さんに来てもらっている。		
42	18	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者と職員と一緒に食事をし、利用者の好み、摂食状態の把握に努めている。摂食困難な方には粥食、刻み食、ミキサー食を提供している。	食事は、利用者と職員が同じテーブルで同じ物を食べ、笑いに包まれた賑やかな食事風景である。また、利用者が長い年数ホームを利用できる原因の一つが、心のこもった美味しい食事であることを、実際に食事をしてみて実感した。	
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量チェック、体重チェックしている。食前にお茶を飲んでいただき水分摂取量を確保している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、一人ひとりに合ったマウスケアを行っている。夕食後は入れ歯の方は義歯洗浄剤に浸けている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	19	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表をつけ、排泄パターンを把握している。夜間はセンサーを利用し、対象利用者が起き上がると直ぐに駆けつけ排泄介助をしている。	経験豊富な職員は、利用者の排泄パターンを細かいところまで把握し、優しい声かけや誘導により、排泄の自立に向けた支援を実践している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	家族がサプリメントを用意している方がいる。腹部マッサージで排便を促したり、毎日定時にトイレに座っていただき排便を促している。		
47	20	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	毎日入浴を設定しているが声掛けて希望者に入浴してもらっている。体力がなく週3回入浴の方もいる。	ほとんどの利用者が毎日入浴し、入浴を拒否される利用者に対しても、気分を変えて入浴できるよう、様々な工夫をしながら支援している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の希望、体力に合わせ自室で寝ている。昼間はリビングのソファ、ホットカーペットの上で居眠りされている時には毛布をかけてあげている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の説明書を職員は読んで確認している。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	季節の行事をしたり、日々の生活(洗濯物たたみ、塗り絵、歌、ビデオ、パズル、会話、習字等)を支援している。		
51	21	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	同じ敷地内の施設には自由に入出入りしてもらっている。月に1~2回外出する機会をもうけ、家族参加も呼び掛けている。	年々重度化する利用者にも、花見、蛍見物、葡萄狩り、コスモス見学、紅葉狩り、外食など、職員は知恵を出し合い、利用者の日々の生活が単調にならないように工夫し、生き生きとした過ごし方ができるよう支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在お金に関心がある方がおられないが以前は5000円ぐらい管理されていた。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	今は手紙を書ける利用者の方がいませんが、プレゼントが届いたときは家族にお礼の電話を掛けるお手伝いをしている、		
54	22	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	加湿器、ホットカーペット、ソファなど年々増やしている。季節を感じるような花を活けたり、飾りつけ(タペストリー、お雛さま等)をしている。	築9年の木造平屋建ての住宅であるが、明るく広々とした玄関、廊下、リビングなど、バリアフリーを施し、利用者が安心して暮らせる共用空間となっている。また、菜園もあり、庭も広く、自然を感じられる環境である。訪問時、中庭の桜が満開で利用者は目を細めて眺められていた。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファ、食卓の椅子、掘りごたつと自由に好きな所で過ごされている。		
56	23	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	最近、入居された方は、テレビ・筆筒・ついたてを居室に持ってこられ、自分の部屋と同じと喜んで馴染むのも早く、落ち着かれています。	居室は、家族と相談しながら出来るだけ利用者の自宅と変わらない環境に整え、馴染みの物を持ち込み、穏やかで楽しい暮らしが出来るよう支援をしている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホーム内バリアフリーで手すりをつけている。トイレがわからない方のために「便所」と書き、貼り紙している。居室入口に赤い花を目印につけている。		